

たまごの

第142号

平成31年 3月 1日 発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
濱崎 嘉一郎
(株) 昭和堂

今こそ子どもを守り育てるとき

～まずは地域での声かけから～



長崎県教育委員

浦川 末子

います。

「子どもは就学前に、すでにレールの半分以上を走っている」「五歳までの非認知能力の向上に重きを置いた教育が人生を左右する」という考え方が、ようやく社会に認知され始めました。就学前に一億円投資すれば、やがてその子が七億円を社会に還元すると言う人さえいます。就学前の保育・教育の重要性にいち早く気づいた先進国では、国のインフラとしての施策に早くから着手して

平成29年度、本県子どもの問題行動調査報告で特に注目したのは、暴力行為の低年齢化と不登校児童生徒の増加です。中・高生の暴力は激減したものの、小学校、特に一年生で急増しています。わずか生後5年間で、子どもの心に何が起きているのでしょうか。また、少子化の中、不登校児童生徒が年々増加し、十数年前と比較しても五百人増となっています。さらに、興味深いことは、平成29年度版内閣府の「子供・若者白書」で「居場所」を尋ねた項目において、1位が「自分の部屋」で89%

2位が「家庭」で79.8%、3位が「インターネット空間」62.1%となっています。子どもにとって居心地のよい場所は、家庭ではなく自分の部屋であること、学校や地域も子どもにとって安心できる居場所になっていないこと等話題になりました。様々な取り組みがなされていますが、子どもにとっては、住みやすく、育ちにくい環境のようです。新しい問題として、スマホ・タブレットに触れる乳幼児の急増もあります。タッチするだけなので、子どもを静かにさせる道具として安易に与えています。長時間利用することとで知性や理性を司る脳の働きに悪影響が出て、思考力や集中力の低下と共に感情コントロールが難しくなることが報告されています。もっと心配なことは、親がスマホをしてい

る間、子どもは無視された状況になり、不安を感じ愛着欲求が満たされなくなってしまうことです。「人間が幸福に生きていくうえで最も大切なものは愛着である。愛着とは、人と人との絆を結ぶ能力で、人格の最も土台を形造っている。安定した愛着が形成された人は、対人関係や適応力、人との深い信頼関係を築き、成功のチャンスをつかむ。」と精神科医の岡田尊司氏は指摘し、英国のポウルビィは、「親に充分甘えるこ

とができ、親と信頼関係を結べた子どもしか主体性は身につかない。」とまで言っています。「愛着」は、「安全基地(母性)」と送り出す(父性)」両方の意味を持ち、心の安全基地があるから、安心して外の世界を探索できるのです。

米国のマズローは、人の欲求を5段階層で理論化し、究極の自己実現を果たすには、「①基本的欲求②安全・安心欲求③愛情(所属)欲求④尊敬(承認)欲求」の各段階を確実に通ることが必要であるとしています。マズローの自己実現は、周りの幸福を願い、その人によって周りの幸福になることを意味し、自己実現を果たした人は、社会的にも成功し、社会貢献ができると教えています。

子どもたちに、志を果たさせるためには、必要な時間と仲間と場を提供し、多様な経験を積ませることはいつの世も変わりません。

以上のことから、国の宝である子どもたちを地域全体で受容し、守っていけば、子どもたちは社会を信じて生きていくことができるでしょう。今こそ、子どもの成長段階に応じた愛と支援が必要です。教育の専門家集団である同窓会の皆様と手を携えて、出来ることから始め、子どもたちを力強く社会に送り出したいものです。

特色ある学校

さくらの学校

～地域の方に学ぶ教室～



平戸市立田平東小学校長 入口 政信

ていて、桜満開の春の情景は見事である。

「さくらの学校」という名前で地域に親しまれている本校は、平戸市田平町の東部に位置する全校児童73名の小さな学校である。校区内に弥生時代の遺跡として全国的にも知られた里田原遺跡や、前方後円墳として県内有数の規模を誇る岳崎古墳を有するなど、歴史豊かな地域にある。

桜が名物の学校は多くあるが、古い本校の写真には、まさに「さくらの学校」と呼ぶにふさわしく、桜に囲まれた学校の風景が残されている。以前よりいくらか減ってはいるものの、現在でも桜の木が多く植えられ

が、地域の人に学ぶ「さくらの学校」である。これは4代前の校長が、子どもたちに地域の方の持つ技や知恵を学ばせ、自分たちの故郷のよさを、すばらしさを感じさせるために始められた学習である。実施に際して様々な準備や打ち合わせを要するが、保護者や地域の賛同を得ながら今に続いている。

具体的には、6月の教育週間内に、2単位時間をつかい実施している。1～6年生までの子どもたちが、それぞれ希望する教室に分かれ、縦割りグループで講師に学ぶ。各教室の許容人数には限りがあるが、できるだけ子どもたちの希望を大事にし、同じ教室を何年も続けて選んで受講

してもかまわないこととしている。開始当時から指導される方の移り変わりにより教室も変遷してきているが、現在は次の7教室が開講されている。

焼き物 学校の敷地内に焼き釜室があり、そこを拠点として陶芸サークルが活動している。その方々に陶芸を指導していただいている。今年度、手回しろくろなど使い、子どもたちは皿やカップを形にすることができた。

日本舞踊 子どもたちは浴衣を用意し、伝統文化のよさを味わいながら日本舞踊を学んでいる。今回は現代風の曲に合わせて、創作舞踊を全員でつくりあげた。

お菓子作り 食生活改善グループを中心とした地域の女性に教わりながら、お菓子作りを行った。蒸しパンやあん団子を作りながらふれあいを深めることができた。

古代文化 文化財関係に詳しい方に、古代の人々の生活について教わっている。今回は弥生人の暮らしから、貫頭衣とガラスの装飾品作りを学ぶことができた。

竹細工 竹細工の名人を招き、子どもたちは竹トンボづくりや飾りヒョウタン作りを習うことができた。

片刃ナイフを使って木を削ったりすることがなくなった現代の子どもにとって、貴重な体験であった。

生け花 地域の花屋の方を講師に、今回はフラワーアレンジメントに挑戦した。学年に関係なく、それぞれ面白い作品を仕上げていた。

絵画 専門的な立場から絵画の基本を学んだ。今年度は色づくりの仕方を練習し、その技法を使って様々な色のアジサイを描き、最後に全員の作品を集め、壁一面をアジサイで飾ることができた。

「学校は地域に浮かぶ船である」という言葉がある。地域があるからこそその学校である。そして、地域は「人」そのものである。地域から人が消えていけば地域は消滅し、学校もなくなっていく。地域からいろいろなことで支えてもらう学校ではあるが、このような活動を通して学校が地域の存続に貢献できるかもしれない。

「さくらの学校」で地域の方に学んだ子どもたちが、故郷への思いを強くして郷土に残り、いつの日か、故郷を支える人材となることを期待するものである。

校内合唱コンクール

県立長崎北陽台高校教頭 藤原 勝志



「行事の北陽台」

長崎北陽台高校は、昭和54年に創立されました。通称「長崎五校」と呼ばれる高校の中で、最後に誕生した学校です。すでに伝統校として県をリードしていた他校に追いつけ、追い越せと「師弟同行」を教育理念のひとつとして、生徒と教師が一丸となり「知・徳・体の調和のとれた人材」の育成を目指し、新しい伝統と実績を築き上げるべく、進路実現や部活動、学校行事に並々ならぬ努力を重ねてきた歴史があります。長崎北陽台高校といえば「行事」。卒業生や保護者の多くが誇らしげに話してくれます。創立以来、本校はこ

の「行事」をある意味教育活動の根幹に位置付けてきました。その中でも特に「合唱コンクール」は、卒業生・保護者・地域から愛されている伝統行事のひとつです。コンクールは、高校総体終了後の6月中旬に全校クラス対抗で行われます。準備期間は1週間、1・2年生は帰りのSHR終了後の30分間、3年生は放課後自学終了後の30分間を使い、各クラスの実行委員を中心に生徒のみで選曲から役割分担・練習計画までを行います。短時間の中、人間関係や温度差、意見の相違など、時にはクラス崩壊の危機にも直面しますが、それを乗り越えレベルの高いものを作り上げていきます。この期間は部活動も活動が制約されますが、顧問の先生方の理解や協力で、この活動がさらに真剣で充実した時間となります。本番が近くなるとクラスの一体感も高まり、学校中が生徒たちの

歌声で溢れ、まさにコンクール一色となります。そして当日は多くの保護者、地域の方々で体育館は満席となり、会場全体が張りつめた緊張感に包まれます。プレッシャーの中、全クラスが最高の荣誉である「最優秀賞」を目指し、各人の努力を形にするためにクラスが一丸となる瞬間です。最優秀賞のクラスのみが文化祭でのステージ発表の出場権を与えられます。その真剣な取り組みは、勝敗を超えた仲間との絆や様々なエピソードを残します。

今年、あるクラスが、「春愁」という曲を歌いました。これはその当時、手術のために学校を休学し闘病生活をおくっている同級生に、「あなたのことを教室でいつでも待っているよ」と伝え、勇気づけるために選曲したものでした。当日、外出を許可され、車椅子で登校した友に、その思いを伝えようと熱唱する姿と歌声は、本人だけでなく、聴衆の心に染み入る合唱になりました。会場が温かい空気に包まれ、車椅子を押す彼のお母さんはずっと涙を流しておられました。人は人に支えられ生きています。そして支え、支えられることの喜びや充実感を皆が体験した瞬間だったと思います。

近年、特に高校では入試制度の変化に対応すべく授業時数の確保等の理由から行事を削減する傾向にあります。確かに行事を充実させることは、ある意味「学習時間」を削るものでもあり、進路実現には無駄なことのように考える人もいます。しかし、進路を実現させるのは「学力」だけではありません。身に付けた「知識」や「スキル」を発揮できる力が必要です。この「行事」を通じた人間同士の関わりと達成感はその力を確実に高めてくれます。日々の学習で学力を、行事や部活動の取組みで体力と知力を磨き「人間力」を高めることこそ、長崎北陽台が目指してきた伝統の教育力だと考えています。

これからも生徒一人ひとりが自己を表現し、感動を共有しながら豊かな感性を育むことのできる伝統行事「合唱コンクール」をさらに楽しく意義のあるものに発展させていく所存です。

わたしの教育実践

初心忘れるべからず



長崎市立稲佐小学校 森 翔

「『初心忘れるべからず』は、初心の時に本当にがんばった人しか言うことはできない。」この言葉を聞いて大きな感銘を受けたのが、新規採用された5年前の時です。この5年間、学ぶ姿勢こそが教員として何よりも大切であるということを知り、先生方から教えていただきました。向上心をもって学び続ける姿勢は、初任の時だけでなく、5年目の今、そして今後の自分にも求められる姿勢であると実感しています。この5年間で多くの先生方から学び、自分が実践したことを紹介させていただきます。

「本気で認める。」これは、学級経営で悩んでいた自分に教えていただいた言葉です。子どもと深い信頼関係を築くためには、何気ない言葉かけでは不十分で、継続的に形にして認めることが不可欠であることを学

びました。そこで、教師が見取った子どものよさを「カード」に書いて毎日、個人に渡すという実践を行っています。これを継続して行うことで、子どものよさに気付き、認めることが少しずつできるようになりました。

「仕事を率先して引き受ける。」これはこれまで関わった先輩の先生方の姿勢です。様々な仕事に対して、不満をもたず快く引き受けることが自分の成長につながると感じています。特に、研究授業は様々な考えに触れて教育観を磨くことができる機会だと捉えています。先日、ある研究授業をさせていただき、「ネームプレート」や「心のものさし」などを使って子どもの考えを引き出すようにしました。今後も研鑽を積み重ねます。教育者としては未熟ではありますが、自分の目の前には、自分を先生として慕ってくれる子どもがいます。今後も学び続ける姿勢をもち続け、教師としての力量を高めていきます。

挑戦から得る学び



諫早市立伊木力小学校 林 由布子

みかんの里である伊木力小学校に赴任して、4年が経とうとしています。多忙な日々ですが、特にこの1年でよく思うことがあります。それは、「やってみてこそ、見えてくることもある」ということです。

今年度も昨年度に続き、6年担任をしています。年度当初、きちんと学級経営ができるか、とても不安でした。しかし、教頭先生から「挑戦の年だ」と背中を押していただき、やる前からできないと決めつけてしまっただけは何も始まらないと思い、とにかくやってみようと思いついてスタートを切りました。

当たり前ですが、昨年うまくいったことが今年もうまくいくとは限りません。子どもたちは一人ひとり、日々、それぞれに思いをもって生活しています。そんな子どもたちの声に耳を傾け、時にはぶつかりながらも、本気で向き合ってきました。卒業の日が近づいてきた今、最初の不安が嘘のように、子どもたちと向き合うことの喜びややり甲斐を感じる

ことができている。

また、研究主任になって3年目でもあります。本校は長年、外国語教育の研究を進めてきました。教師になって5年目でその役目を担うことが決まったときは、私に務まるのだろうか、大きな責任と重圧を感じました。しかし、周りの先生方に御指導いただき、様々な研修会に出向いて勉強する中で、外国語教育や、研究の進め方について、多くのことを学ぶことができました。本校で研究主任をしなければ、決して学ぶことはできませんでした。最初は正直、なぜ私が……?と思いましたが、やってみてこそ見えてきた、今は役得だとも思えるようになりました。今後の教師人生に生きる大切な経験をさせていただいたと思っています。

教師としてまだまだ未熟者ですが、これまでに経験させていただいたことをこれからの教育に生かしていくことが、学びの機会を与えてくださった方々への恩返しであり、使命だと思っています。

合うことの喜びややり甲斐を感じる

共に過ごす喜びを感じて



佐世保市立鹿町中学校 石井 桃子

初任校での三年間が過ぎようとしている今、期待と不安でいっぱいだった1年目の4月がつい最近のように思い出されます。まさに右も左も分からない中、「多くの時間を生徒と共に過ごす。」とにかくそれを目標に頑張ろうと心に決めていました。それから二年間続けて学級担任を経験しましたが、目まぐるしく過ぎる日々の中で1年の流れを掴むのに精いっぱいでした。初めに決めた目標も、日々の慌ただしさに埋もれてしまいがちでした。

少しずつ色々なことに慣れてきた3年目。今年こそはじっくりと生徒と向き合い共に過ごす時間を大切にすると決意を新たにしました。そんな私に、あるチャンスが巡ってきました。特別支援学級の担任をすることになったのです。教師として、たった3年目の私にとっては難しい挑戦でしたが、「生徒と共に過ごす」と

いうあの目標に近づけるチャンスだとも感じました。学年の異なる4名の生徒が在籍する学級。一人ひとりの状況は異なり、個に応じた支援が必要で。特別支援教育の知識も十分でない中、毎日が新たな経験と勉強の連続でした。

一人ひとりと目線を合わせてじっくりと向き合ってみると、本当に多くの発見がありました。子どもたちは素直な表現で私に色々なことを教えてくれます。1年生の子の、4月からの成長は驚くほどのものでした。日々沢山の困難に出会いますが、私の言葉や関わりを素直に受け止めて前向きに変わろうとしてくれます。そんな一瞬一瞬の変化や成長に関わることができ嬉しさを実感する毎日です。

教師としての喜びや大切なことに改めて気付かせてもらったこの一年間は、私にとって大変貴重な経験だと思っています。今後どんな生徒と出会っても、生徒と共に過ごす時間を大事にしたいです。

走って歌える音楽教師



時津町立時津中学校 松本 公義

「松本君、君は良い音楽の先生になれないよ。」これは、私が大学生時代の恩師の言葉です。音楽の教員を目指している私にとっては、思

いもしない言葉で、あれから20年が経つというのに、未だに頭から離れません。先生の言葉には、「音楽が好きで、得意なだけでは、音楽が嫌いで苦手な人の気持ちからなさい」という意味が込められていました。確かに、私はピアノも幼少期から習っていたし、歌も努力をしたお陰で豊かに表現できるし、吹奏楽の経験もある。しかし、私には技術的なスキルしか身につけておらず、生徒の視点はありませんでした。今思うと、この助言が私の指導の基盤となっているように思います。

私が心掛けていた授業作りは、「本物に触れさせる」ということです。例えば、ベートーヴェンの交響曲第五番ハ短調「運命」を指導する時に

は、ホルンが活躍する部分の演奏を私が演奏し、生で聴いてもらっています。また、1年生の「箏」の指導では、オリジナル箏曲を作曲させ、一人ずつ発表を行っています。そして、その最後に私自身のオリジナル箏曲を披露しています。演奏後の反応が、毎年の楽しみでもあります。もう一つ、私自身が大事にしていることがあります。それは、教科外のことではありますが、体育大会の長距離走を生徒と一緒に走るということです。一番きつい場面に本気で取り組むという姿は、意外にも教科指導にも生きてきます。私が苦労を実践していると、より強くメッセー

ジを伝えられるからです。「苦手でも頑張ればかっこいい」ということ、あきらめないことが、君だけのゴールであること……。時津町では、毎年、町主催のロードレース大会があり、その中でミニ駅伝にも、先生たちとチームを組んで走っています。「走って歌える音楽教師」私にしかできないこと。この精神を貫き通し、昨日を超える自分作りに、今日も励みたいと思います。

も励みたいと思います。



公民館講座に携わって

長崎市小浦町 西村 敏彦
(昭和51年3月卒)



皆さんは、公民館に行ったことがありますか。また、公民館講座を受講したことがありますか。公民館を一度も利用したことがない、公民館ではどんな講座が行われているのかわからない、という方がかなりいらっしゃるのではないのでしょうか。

私は、退職してから現在まで5年近く、公民館講座の企画・運営に携わっています。

私の勤務している公民館では、春の講座、秋の講座、夏休み子ども教室、冬の特別講座を合わせると、60を超える講座が行われています。それらの講座を企画し、運営していくのが私の仕事です。

限られた予算の中で、地域の方々のニーズに応じた講座を企画していくのですが、かなり大変な仕事で、時期によってはかなりプレッシャーがかかり、心身共に疲れ果ててしまうこともあります。他の職員の方々の協力により、何とか乗り越えることができています。そして、この頃やっと、「この公民館にはいい講座が多いですね。」と言っていただいたり、「初めてこの公民館の講座に来ました。」という方が多くなってきたりしているのを感じています。そのことが公民館の利用者増につながってくればいいなあと考えています。

公民館を一度も利用したことがない方、公民館がどんなことをやっているのかわからない方がまだまだたくさんいらっしゃると思います。そんな方々に、公民館のことを知っていただき、足を運んでいただくことが私の役割だと考えています。

皆さんも、是非一度、公民館講座に参加してみてください。よろしくお願ひいたします。

「親守詩」の活動

〜キヤッチボール短歌〜

長崎市立西山台小学校
末光 秀昭
(昭和62年3月卒)



授業中、教室へ入らない。入ったとしても授業の邪魔をする。指導をすると教師の腕を振り払い、教室の中を逃げ回る。机の上をぴよんぴよん飛ぶ。時には近くにいる友だちに次々と暴力をふるって行く。その子を抑えると、今度は教師の体を叩いたり、腕に噛みつきたりする。別室でクールダウンさせようとすると、部屋にあるものに当たり散らし、壊して行く。こういう日が毎日続く。関われる教師もへとへとだ。当然、学習できる環境ではない。いじめもはびこった。

他にも種々の問題が多発した。保護者からの訴えも頻繁となった。管理職をはじめ、多くの教師が関わる

ようになるが改善できなかつた。このような「凄まじいクラス」は日本中何処の学校にでもある。翌年、このクラスを担当した。正直、大変であった。でも、私たち教師は、そのような現場から逃げてはいけない。その子たちを救うのは私たち教師にしかできないからだ。しかし多くの教師は、そのような支援を要する子へのアセスメントに苦勞している。思い付きの指導や昔ながらの指導では、全く太刀打ちできない。

私たち「T.O.S.S長崎」(教育研究団体)では、「親守詩」活動(短歌の創作活動)を通して子どもと向き合っている。子どもが上の句「5・7・5」をよみ、それを受けて親が下の句「7・7」をよむ。感謝の気持ちや親心を歌う「キヤッチボール短歌」活動である。そういう活動を通して子どもとの信頼関係を築いている。

私たち教師は最新の情報を学ぶ必要がある。専門医であるドクターとの連携、最新の書籍、特別支援・学級経営のセミナー等である。任意のサークルに入り、学級について情報交換するのもいい。

私たちの仕事は「子どもの生きる気力」を育てる崇高な理念のもとに行わなければならない。

日々、成長

長崎市竹の久保町 前田 悠里

(平成27年3月卒)



そもそも飛行機なんてあまり利用したこともないし知識もないのに働けるだろうか……。そんな不安を抱えながら入社し、早いもので4年が経とうとしています。私は今、航空会社の予約案内センターでコミュニケーションとして受電業務に励んでいます。航空券の予約や解約はもちろん、航空関連の様々なお問い合わせにお応えしています。今お話ししているお客様にとってベストなご案内を考え、それを電話越しに言葉だけで伝えるということが難しく、またお客様が本当に知りたいことなどを引き出せないことも未だにあり、試行錯誤しながら対応しています。

そんな中、受電以外の担当業務も

持つようになり、私の社会人生活が大きく変わりました。受電業務を行いつつ、コミュニケーションひとりひとりのお客様対応のレベルがより高くなるように、そしてよりよい会社を目指すために、各担当を設けたらば運営的な業務を行っています。

また、4年目の春からは自分のチームも持つことになりました。それまでは自分のことで精一杯で視野が狭かったものが、チームや会社全体にも目を向けることになり、仕事に対する考え方もガラリと変わりました。大変なことも増えましたが、先輩指導にもより関わりを持てるようになり、その分やりがいも増えました。

プライベートでは、今年に入ってから、運動不足を解消すべくフットサルの社会人チームに参加しました。また、会社にバスケット部ができたので月に何度か公共の体育館を借りて同僚とバスケットをしています。サッカーもバスケットも未経験者、経験者混合なのでほどよい運動量で楽しく参加しています。せっかくバスケットとサッカーを始められたので、これからも働きつつ運動しつつ、充実した毎日にしていきたいです。

教師をめざして

長崎大学教育学部4年

尾崎 勇人

「先生になりたい。」私の夢の始まりは小学校5年生のときの担任の先生への憧れでした。担任の先生は私たち児童を本気で叱り、本気で遊んでくださり、毎日朝早くから先生とサッカーをすることが楽しみで仕方なかった少年時代をつい最近のことのように思い出します。その姿を見て、自分もこんな先生になるんだと強く心に決めました。それから私は夢に向かって走り続けてきました。走り続けてきた道の中ではたくさんのお会いがあり、家族や友人など関わってくれたすべての人のおかげで今の私がいまいます。私はこれらの人々への感謝の気持ちを生涯大切にします。そして4月からは私が憧れた先生のように、子どもたちと本気で向き合いたいと思います。

4月から始まる私の教師としての新しい夢は「子ども以上に学び続けること」です。児童理解や授業研究、学級経営など学ぶべきことはたくさんありますが、夢に向かって、そして子どもたちの笑顔のために学び続けます。

長崎大学教育学部4年

岩崎 杏菜

私は、子どもの心に寄り添うことができる教師になりたいと思います。また、「ありがとう」の言葉で溢れる笑顔いっぱいの子供づくりをしていきたいです。

誰かが笑顔でいると周りにも「笑顔の輪」が広がります。自分も周りも笑顔だと、楽しく嬉しい気持ちが大きくなり、友達の良さを認める心の余裕ができます。しかも、考え方が前向きになり行動も意欲的になると思います。また、「すみません」よりも「ありがとう」と言われる方が嬉しいので、日頃から「ありがとう」を言うようにしたいです。私が大事にしたいこの2つを子どもたちに伝え、周りの人のことも考えられる心優しい子どもたちを育てるのが私の夢です。そのために、教育課程全体を通して、子どもの喜びや悲しみ、悩みを知ることが最優先します。教師と子どもとの信頼関係の構築に努めます。その中で、学級の約束を明確にし、自主的な活動を計画的に仕組んでいきたいと考えています。4月からの教壇は楽しみと不安が半々ですが、自分の信念を大事にして歩いていきます。

母校だより

日本公認
編

教職大学院を活用する

長崎大学教育学部長 松元 浩一



教育学部同窓の皆様、お変わりなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。本誌先号(百四十一号)では「教職大学院で学ぶ」と題して大学院をご紹介いたしました。今号ではその内容をより具体的にご案内いたします。

皆様の母校にある教職大学院には、管理職養成コース、子ども理解・特別支援教育実践コース、学級経営・授業実践開発コース、教科授業実践コースの四コースがあります。管理職養成コースは一年間で修了する課程ですが、他の三コースは一年間または二年間で

修了する課程です。修了後にはいずれも「教職修士(専門職)」の学位が授与されます。授業は全て「教育の理論と実践を架橋する」ことを基本として構成され、本県の学校現場における課題を解決することに主眼を置いています。研修派遣の定員は十名程度、来る四月には新設の管理職養成コースを含む四コース全てに、気鋭の先生方が集い、学校の組織力を高めるリーダーとして修了することが期待されています。

現代は、情報科学の発展によって知の蓄積は膨大となり、分散化した知を統合したり再構築したりと、高度化した知識を使いこなす事の本質を見抜く眼力が求められています。リルケが「マルテの手記」のなかで「ぼくは見る目ができてきた。これからも怠らずに修養しよう。」と書いているように、教職大学院は、さまざまな教育実践例に学ぶだけでなく、その背後に存在する基本的な考え方や見方など、まさに「見る目」を養うところです。そのために、例えば、特別支援教育や通級指導等について学ぶ「特別支援教育の心理学」、特別支援教育の授業・教育課程論、「特別支援教育コーディネーター論」、

授業を通じてより効果的な指導成果を得る方法(チームティーチング等)について考察する「授業デザイン演習」、授業の本質やそのあり方を深く検討する「授業研究と教師教育」、授業研究の理論と実践、「カリキュラム・マネジメント」、教員の学び直しやスキルアッププログラムとして、長崎県教育委員会等と連携した「学校経営総論」(長崎県の教育課題、学校経営における学力向上、家庭・地域との協働、男女共同参画、学校経営における危機管理、教育行政における施策ほか)等の授業が開設されています。

通信技術や人工知能を始めとするテクノロジーの発達によって加速度的に日々情報が更新される世の中にあっても、時流の変化に拘らず、子どもたちには「生きる力」が求められています。高度なテクノロジーの進歩によって、これまで見えなかったものが可視化されたり、真偽も定かでない情報が氾濫するなかで、徐々に人々の働く場が奪われ、「生きがい」とか「心のはりあい」とか、見えにくかったものが一層かすんでしまう今日です。エクトル・ガルシアはその著書 *Being* のなかで「生きがい」を構成する要素に、得意なことができること、好きなことができること、社会から必要とされること、収入があること、四つを挙げています。これらの要素からなる「生きがい」や学習指導要領にある「生きる力」を真

イエンスやアカデミアではなく、学校教育や社会教育であります。

教師が子どもたちに「生きがい」や「生きる力」という抽象的な概念を分かりやすく教えようとするときには、個人の経験のみを頼りとするドグマに陥らないように、教員同士の対話が必要になると思われます。このようなきこそ、教職大学院の出番です。大学院には、日常の教育実践を持ち寄って少人数のグループで聴き合い、その課題等を共有し探究する「ラウンドテーブル」や、各教科の指導を語り合い省察するセッションや、外部から講師を招聘して講演やシンポジウムを行うフォーラムなど、対話や交流の場があります。それらの詳細は、改訂されたばかりのホームページ(<https://www.gedunagasaki-u.ac.jp/>)をご覧ください。

同窓会の皆様、大学院のご活用をお待ちいたしております。

最後に、この場をお借りして玉園同窓会東彼杵地区懇話会の皆様に御礼を申し上げます。十一月二十三日に同地区懇話会に出席し、教育学部・教職大学院の現状と課題についてご紹介いたしました。お世話下された原源吾彼杵小学校長様を始め、諸先生方に深く感謝申し上げます。末尾ではございますが、同窓会一人おひとりの御多幸と御活躍を深く念じております。

動いています同窓会

地区懇話会

東彼地区懇話会の概要

事務局長 野中 元則

本会の開催は、今年度で14回目を迎えました。

今回は、長崎大学教育学部長の松元浩一先生を講師としてお招きし、東彼地区で開催しました。

日時 平成30年11月23日(金)

場所 恵美須屋(川棚町)

参加者 学部長1名 現職会員14名

理事他5名 計20名

懇話会 初めに東彼地区長の原源吾校長から開会のあいさつがありました。

次に、教育学部長の松元浩一先生からあいさつがあり、その後引き続き「教員養成の現状・課題・これから」と題して、同じく松元先生の講話がありました。

教育学部の学生組織と履修免許・資格、入試方法、就職状況とその支援活動、平成29年度の就職状況及び課題、改革に関する取組状況等、詳しい資料をもとに分かり易く説明をしていただき、大学の現状と課題を身近に知ることができました。私共、長大出身者の一員として、あらためて大学との関わりをいかに持ち、協

力していけるか、私共の課題もあるように思いました。

懇親会 先輩、後輩が一堂に会し昔

に戻って親しく語り合う場が設けられたことで、絆が

より深まったと思えました。

活力を得た一日

波佐見町立南小学校教頭

坂口 洋介



昨年11月23日、川棚町において、長崎大学玉園同窓会東彼地区懇話会・懇親会が開催されました。私は、大学を卒業して26年が経過していますが、この会には縁がなく、初めての参加でした。

まず、懇話会では、長崎大学教育学部長松元浩一先生から「教員養成の現状・課題・これから」というテーマで講話をいただきました。現



在は、教員を目指す学生のために、大学があらゆる面から支援をすることや学生が自分の夢に向かって努力を重ねていることを改めて認識しました。また、拝聴しながら、長崎大学は、学生と先生方が、「これからの子どもたちのために」という同じ理念をもっている「学びの場」であることに気づき、我が母校のことを誇らしく感じました。

続いて行われた懇親会は、雰囲気も柔らかくなり、参加者で大いに語り合うことができました。諸先輩方は、学校現場の現状を十分に理解されており、示唆を与えてくださったり、ねぎらいの言葉をかけてくださったたりしました。どの言葉も大変温かく、また、深みがあり、その意味を噛みしめながら聞かせていただきました。

さらに、現役職員の自己紹介をとおして、同郷であることや同じゼミナールの先輩と後輩であったことが、初めて明らかになるなど、多くのつながりが生まれ、会員同士の距離が縮まりました。

私は、本会に参加することで、母校愛というのは、母校を大切に思う気持ちであるとともに、母校を中心に感じる人の温かさでもあることができました。大きな活力を得ることができました。現在勤める学校でも、子どもたちの郷土愛や愛校心を育むために力を尽くしていきたいと思えます。

就職支援事業

セミナー受講感想

長崎大学教育学部4年 高柳 侑奈

二次試験の対策をどのように進めたら良いか戸惑っていると、時間だけがあつという間に過ぎていきました。焦りと不安が大きい中、就職セミナーに参加してからは、講師の先生方のご指導のもと、すぐに対策に取り組むことができました。一人一人に時間をとって丁寧に指導していただき、友だち同士で対策をしていて、なかなか深めることができないところを、一緒に考え、アドバイスしてくださいました。また、午前中のセミナーに参加することで生活スタイルも整いました。毎日参加してコツコツと積み上げていくことで、焦ることなく落ち着いて対策に臨めたと思います。講師の先生方はいつも優しく、私たちを笑顔で温かく迎えてくださいました。私にとって、先生方にお会いできることが毎日の楽しみであり、心の支えでした。無事に二次試験を乗り越えることができましたのも教職セミナーでたくさんのご指導を頂くことができたからです。本当にありがとうございます。

公益目的事業の募集

長崎大学同窓会は、一般社団法人として長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的としての活動を行っています。

この目的を達成するための事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。31年度も下記の要領で募集を行いますので、周知のうえで応募ください。

図書購入費助成事業

- 1 助成校 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校（7校程度）
- 2 助成額 1校につき10万円未満
- 3 募集期間 平成31年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の学校は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した学校へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 学校は、「申込書」に、「購入図書計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した学校に通知する。



（対馬市立豊小学校）

児童・青少年健全育成事業

- 1 助成の対象となる事業
 - ① 児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化の継承・社会貢献などの実践活動
 - ② 健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
- 2 助成額 1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね2分の1を限度とする。
- 3 募集期間 平成31年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の団体は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した団体へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 希望する団体は、「申込書」に「実施計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した団体に通知する。
 - ⑤ 助成を受けた団体は、事業実施後、「実施報告書」を提出する。

一事一務一局より

「終身会員」への入会願い

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしくお願ひいたします。

(1) 入会金 5,000円（終身にわたって、会報を送付します）

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡してください。すぐお届けいたします。

ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や公益目的事業について、会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。そこでホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思いますので皆様の御活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>
メールアドレス nu-tamazono@mxb.cncm.ne.jp